

資料紹介

華北農村調査の記録

—二〇一三年八月、山西省P県D村の聞き取り記録—

河野 正

一、調査概況

(一) 調査概況

筆者は二〇一〇年より科学研究費補助金基盤研究（A）「近現代中国農村における環境ガバナンスと伝統社会に関する史的研究」（研究代表者内山雅生）の研究グループに参加し、山西省の農村で農民から聞き取り調査を行っている。本稿は本年度の調査記録及び調査結果に関する解説・考察である。

筆者自身はこれまで一九五〇年代の華北農村を研究対象とし、農村社会の変容について、中国共産党（以下中共）の諸政策との関わりの中で考察を行ってきた。その中で最近、基層社会における中共の階級政策及び戦時動員について関心を持ち、研究に取り組んでいる⁽¹⁾。それは、階級政策が中共によって村落へもたらされた新秩序であり、村落におけるその受容過程は中共が基層社会を掌握できていたか否かの一つの基準として重要であると考

えるためである。また戦時動員は社会の掌握との関係が強く、中共が如何にして戦時動員を行ったかは、階級と同様に中共の基層社会に対する掌握の度を測ることができるだろう。そこで本年の聞き取りはその二点について重点的に聞き取りを行った。

なお本調査は山西大学中国社会史研究中心との共同調査であり、本年度筆者は同中心の李嘎氏・趙中亜氏とともに聞き取りをした。聞き取りでは現地の方言など理解が難しい言葉・概念も多くあり、その都度、李・趙両氏へ説明を求めるという方法を採用した。また聞き取り(一)、(二)には一橋大学院博士課程菅野智博も参加している。

(二) 調査村について

調査村落は山西省P県に位置するD村であり、县城から北へ五キロの距離にある⁽²⁾。P県は山西省中部の晋中地区に位置し、現在は晋中市に属している。ここでP県及びD村の歴史及び概況について触れておきたい。

県の歴史は長く、清代には山西商人で栄えたこと⁽³⁾で有名である。近現代には一九三八年に日本軍に占領され、日中戦争終結後、国共内戦では一九四八年七月に中共の支配下に入った。県全体の人口は一九四九年時点で六六五五戸、二四三二一三六人とされている。一九五〇年当時、県は八の区に分けられ、三一九行政村、四五八自然村を包括していた。その後、二〇一二年時点の統計では総人口五〇六〇八五人のうち三二四七五六人が農業人口である。現在県全体に一四の郷鎮が置かれ、二七三の行政村が存在している。

また人文的条件として宗族の存在を考えると、特に多い姓は王・張・李などであるが、一般的な華北地域の傾向として、華中・華南ほど宗族のつながりは強くないと思われる。

次にD村について見てみたい。人口は一九四九年時点で二〇五三人の農業人口があり、一九七八年には二九三五人に増えている。その後、二〇一一年時点では一〇〇六戸、三四〇〇人になっている。現在村民の七割以上がW姓であり、T姓が二割弱を占める。その他にGなどの姓もある。一九四九年時点ではW郷に所属しており、一九四九〜一九五〇年の間は区公所がD村に置かれていた。また一九五六年には郷の名称も代わり、D村の名前が取られてD郷になっている。一九五八年当初はS人民公社に所属していたが、一九六一年にはW人民公社が独立した。現在村の主要な産業は農業であるが、歴史的には前述の山西商人も多く、彼らが村内の地主・富農層の一部を形成していた。現在もそのような傾向はあるのか、収入の多くの部分を農業以外に頼る農民が多いことが弁納才一「華北農村訪問調査報告（六）——二〇一一年八月、山西省の農村」『金沢大学経済論集』第三二巻第二号、二〇一二年三月 一七三—一九四頁における聞き取りなどからも指摘されている。

ここで基層の行政組織及び党組織について説明を加えておきたい。人民共和国初期は、中国の歴史上初めて、全国規模で中央の政権が村レベルまで直接的に統治した時期に当たる。D村においても行政組織であるD村政府とともに、中共D村支部が置かれた。その後一九五八年に人民公社が成立すると、当初はS人民公社D生産大隊、後にW人民公社D生産大隊となる。人民公社は「政社合一」の組織であり、党組織も基層政府もこの中に取り込まれ、村長は大隊長になるとともに、生産大隊内に中共党支部が置かれ、それまでの村の書記や副書記は生産大隊党支部書記・副書記となる。そのため例えば（二）JSLは一九六〇年から村の副書記であると答えているが、これは正確にはD生産大隊党支部副書記のことである。とはいえ、聞き取り部分についてはできる限り聞き取りに忠実に記録するべきと考え、本稿では「村の副書記」としてある。

D村を対象として聞き取りを行う最大の理由は、その史料面の特徴にある。D村では一九五〇年代から八〇年

代に至るまで、村の文書が保存されており、それは現在、山西大学中国社会史研究中心へ移管されている。現在山西大学では山西省各地の基層文書の収集を広範囲で積極的に行っており、これは「集体化時代農村基層檔案」と名付けられている⁽⁴⁾。この史料群は膨大な量に上るが、D村の史料はそのうち「D村檔案」として管理されている部分である。その内容は村行政から文革時期の個人檔案まで多岐にわたり、史料的价值は高い。そのためD村を対象とすることで、聞き取りを文書史料と対照をすることが可能となり、意義は大きい。なお同村におけるこれまでの聞き取り記録については、筆者による聞き取り記録として河野正・田中比呂志「華北農村訪問調査報告(二)——二〇一〇年八月・十二月、山西省P県D村」『東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅱ』第六三集、二〇一二年 一〇一—一二頁、他のメンバーの聞き取りとして前述弁納二〇一二などがある。

なお、プライバシー保護のため、本稿では人名・地名はアルファベット表記としてある。地名は例えば北京市ならB市、人名は例えば毛沢東ならMZDと表記する。

二、聞き取りの記録

(一) TYC

二〇一三年八月一五日 午前

調査者…河野正 菅野智博、李嘎、趙中亜

インフォーマントの年齢・干支…七四歳 辰年

TYCは一九六〇年代に従軍歴があり、軍隊に関する質問を中心に行った。当時毛沢東・劉少奇・朱徳らと集

合写真を撮ったこともあり、その写真は現在も家に飾られている。

家庭について

・父はT H Y。一九九一年に八六歳で死んだ。干支は覚えていない。旧社会では寧夏で劇をやっていた。当時村で劇をやるのはT H Yだけだった。劇を始めたのは二伯の影響。なおT H Yは三男。エゴの弟二人も後に劇を始めた。

・弟たちにはエゴの父が劇を教えていたが、その後劇団の団員募集があり、弟たちはそれに参加をした。劇団での生活は良かった。父は土地改革の時に村に帰ってきて、その後劇はやらなかった。劇をやっていたからといって特に土地改革には影響はなかった。

・土地改革の時は六〇七〇〇ほど分配された。元々持っていた土地と合わせて一〇〇〇〇〇余り。また家屋も幾つか分配された。当時家族は六〇七人だった。

軍歴について

・一九六〇年から一九六六年頃まで北京軍区で参軍。北京と天津の間に位置する楊村に駐屯。蔣介石の大陸反攻に備え、半年ほど福建に駐屯した時期もあった。

・軍隊に行った理由は生活が苦しかったのと、兵士になりたいと考えたため。

※では軍隊に行った他の人たちも皆生活が苦しかったから行ったのか？（答）軍隊に行くのが光栄なことと考えて行ったものもいた。しかし村には家庭環境が良いのに兵隊になったという人はいなかった。

・給料は当時、月に六元。日用品なども支給されずに自分で買ったため、六元は決して多い額ではなかった。ま

た、軍隊に在る間、二度しか家に帰ることができなかつた。食糧は一カ月一人につき四五斤。二斤ほど余つたのでそれは家に送つた。

・エゴは軍隊の中で成績が良かった。清華大学や天津戯劇学院の学生が夏休みに軍隊で体験生活をしたが、彼らの訓練もエゴが行つた。一九六六年、上級はエゴに軍校に入学させようとしたが、エゴは長年軍隊にいて軍隊の生活が嫌になつたため入学しなかつた。

(ここに毛沢東らと一緒に撮つた写真についての話に)

・撮影したのは一九六四年。大比武の際。大比武とは軍隊の中で様々なことについて行ふ試合のようなもの。例へば炊事員が、誰が一番早く食事を作ることができるか、誰が一番料理をする時に煙が少ないか(敵に気付かれないようにするため)などまで競う。

村での仕事

・除隊後、村では第八生産隊長や民兵営長、林業主任、また第三生産九隊の政治隊長などを務めた。文革時期、隊長だから良いことがあるということとはなかつた。

・生産隊長の仕事は隊の土地に何を植えるか、労働点数一点につき幾らに換算するかなどを設定すること。労働点数を幾らに換算するかは生産隊によつて異なる。

・当時、公糧は各生産隊でそれぞれ納めていたが、その量は多かつた。皆、公糧を少なくするためにコネを使つたり不正を働いたりしていた。

・当時生産隊では作物を盗んで売っている者もいたが、エゴは見て見ぬふりをしていた。

・外で商売をして、収入の一部を隊に納め、代わりに労働点数をもらうこともできた。例えば泥匠、木工などは外で労働をしていた。

・労働点数は、基本的に朝二点、午前四点、午後四点、一日で一〇点になる計算。女性は食事の準備などのため朝の労働ができず労働点数は低くなり、八点となる場合が多かった。

・具体的に各人の労働点数が何点になるかは皆で話し合つて決める。年齢などによつて差が付くこともあるが、基本的には変わらない。

・一つの隊は二〇〇人あまり（含子ども・老人）。その中で労働力は六〇〜七〇人ほどで、毎日出せる労働力は四〇〜五〇人ほどだった。これは季節によつて異なり、例えば夏の麦の収穫時には出勤率は高くなつた。

(二) J S L

二〇一三年八月一五日 午後

調査者：河野正、李嘎、趙中亜

インフォーマントの年齢・干支・七七歳 丑年

J S Lは老幹部であり、これまで他メンバーから数度にわたりインタビューを受けている。今回は四清運動時期の幹部として、当時の階級をめぐる状況を中心に質問した。

農業集団化時期

・一九六〇年から村の副書記。当時の村の人口は五〇〇戸、二〇〇〇人余り。当時は集団化時期のため外に出稼

ぎに行く人はいなかった。

・共同食堂は一九五七～一九六二年にあった。各人毎日八両の食糧を食べられた。窩頭など。当時、幹部や料理人が多く食べ、村人が食べる分が減っている、という不満があった。

・一九五九年時点まで人民公社に参加しないものもいた。一戸だけで名前はMSRといった。当時五十歳過ぎで性格が頑固であつたため。彼は一九六〇年になってやっと入社した。

・MSRは土地改革の時にも貧しかったにも関わらず土地や家屋を分配されることを拒否した。これは思想の問題によるものであり、地主が後から逆清算をして仕返ししてくることを恐れたのと、「他人のものを欲しくない」と考えていたため。

・MSRは最終的には公社に入社し、副生産隊長になり、七〇歳過ぎまで生きた。彼は解夢ができるなど、道士のようなことをしていた。彼の性格は頑固であつたため他人とはあまり交流をせず、人と打ち解けるのが難しく、そのため威光や人望はなかった。

四清運動について

・初めは三清として一九六三年～一九六四年に行われた。三清とは政治・労働点数・経済の三つを清めること。一九六五年～一九六六年に四清になり、四清工作隊が村へ来た。

・L県の幹部や山西医学院の人たちが工作隊として村に来た。山西医学院の人は多くは学生だった。工作隊は二〇人余り。

・工作隊はまず大会を開き国家の政策を説明。その後各家を回って幹部の四不清の状況について聞き取り。大衆

に深く入る路線を採った。

・当時村では塩化カリウムを作る副業をやっていた。四清工作隊が帳簿をチェックした結果、副業主任のSXが、その副業の金二〇〇〇元あまり汚職をしたことが発覚し党籍を解かれた。また会計のZWZも加担したとしてレットテルを貼られた。

・採購員だったHLHもレットテルを貼られたが、彼については冤罪であったため、後にレットテルを剥がされた。彼らがレットテルを剥がされたのは、毛沢東の「誤りは必ず正さねばならない」という呼びかけによる。

四清時期の工作隊のその他の仕事

・TGFという獣医が偽の証拠で幹部を攻撃しようとしたが、四清の際、それが嘘だったことが明らかになり、壊分子のレットテルを貼られる。彼がそのようなことをした理由は幹部に不満があったため。他にも小さいことはたくさんあった。

・一九六六年前半、工作隊は村を出た。そうして四清が終わり、文革が始まった。

・四清運動に際して階級の復査があった。村の地主たちは四清時期の復査でも改めて地主とされた。彼らは昔から土地を持っていた。山西商人だったものが多い。

・WHという富農は娘の大学受験の際、富農の子は受験できないため、四清で手を尽くし、村の党支部書記に自分の成分を中農に変えさせた。これは発覚し支部書記は職を解かれた。

(三) G Y H

二〇一三年八月一六日 午前

調査者・河野正、菅野智博、李嘎、趙中亜

インフォーマントの年齢・干支・七八歳 子年

社会で階級が果たした役割を探るため、貧農や雇農と異なる、「悪い階級」の人から話を聞こうと、G Y Hを尋ねた。G Y Hは土地改革で上中農に分類されている。

家庭について

- ・ 一九五七年に結婚した。妻は本村人で七五歳の卯年。子どもは娘五人に息子二人。
- ・ 母が汾陽出身であり、本人も本籍は汾陽。生まれも汾陽で七〇八歳の頃にD村に来た。
- ・ 父はG R J。上中農。生きていたら一〇〇歳は超えている。一九九一年に八八歳で死亡。
- ・ 父・祖父はD村の人で山西商人であった。民国二二年の大水害から逃げて汾陽にいた。
- ・ その後、一九三七年にD村戻ってきた。当時は老爺廟の東側で他の人の家を借りて住んでいたが、一九四一年に大洋二六〇〇元を支払って今の家を買った。
- ・ 父はX県で錢莊をやっていた。また寧夏でモンゴル人などを相手に商売もしていた。数十日かけて取引に行き、帰りは毛・皮・家畜などを持って帰って売り、差額を利益とした。祖父・父の稼ぎのおかげで現在の家を買うことができた。
- ・ 解放の時土地は二〇ムー余りあった。土地が多く家も大きかったため、上中農になった。

・父は解放の時はまだ寧夏にいて五四〜五五年に戻ってきた。その後第八生産隊で保管員をした。

・二番目の兄GYCは志願ではなく抗米援朝に徴兵される。理由は「三抽一、五抽二（三人兄弟なら一人兵士を出し、五人兄弟なら二人兵士を出すという機械的な割り振り）」政策のため。参軍したくないので兄を頼って天津まで逃げた。その後ずっと天津におり、「戸籍もなし崩し的にどうにかなった。逃げたことで特に追求はなかった。村内で他にも四〜五人ほど逃げたのはいる。その中で現在村にいて生きているのはWSQ。八〇歳余り。

出稼ぎについて

- ・一九五〇年代に初級中学卒業後ずっと外で労働者として働いていた。
- ・県城で働き出したのは一九五八年、初めは発電所で。その後一九六二年の「圧縮（都市部の人口抑制）」に伴い村に戻る。その後改めて契約労働者として電工や木工などをやった。これは「三項費用」の一環として、収入の十%を小隊に上納した。その間、住居は村で県城まで毎日自転車を通った。
- ・一九七一年より県城のP県監獄で木工の仕事をした。それは具体的には労働改造をされる人々に機器模型作製の指導などをする仕事である。木工の仕事をしたのはわずかで、その後は色々な仕事をした。これらの仕事で公社から労働点数をもらうことはなかった。
- ・囚人数の増減と文革など外の運動とはあまり関連がない。

(四) WYZ

二〇一三年八月一六日 午後

調査者・河野正、李嘜、趙中亜

インフオーマンツの年齢・干支・七二歳 午年

午前中に引き続き、「悪い階級」の人を訪ねた。WYZも(三)GYHと同じく上中農。

家族について

・祖父の名前はWTR。一九三七年より前に四〇歳過ぎで死んだ。子どもはエゴの父一人だけ。祖父は三人兄弟の三人目。父の名はWZ。県城で商売をしていた。祖父と同じく早死にしており、土地改革の時には既に死んでいた。母親はJ村の人。

・土地改革の頃、所有する土地の量は二〇ムー以下。家族はエゴ・祖母・母・兄の四人。長工二〜三人を雇って耕させていた。長工はD村ではなく外の人。

・土地改革では上中農になった。他にも村には数十戸の上中農がいた。上中農の条件は四ムー以上の土地と家を所有する者。五〜六ムーの土地を所有する者や、家、車、馬があり人をやとっているのは富農。土地などがもつと多く、通年で人を雇えば地主。

・地主の財産については、家屋・土地はどちらも分配する。富農については土地のみ分配し、家屋は分けない。上中農・中農の土地や家屋は動かさない。

・学校へは解放後、九年間通った。初級中学まで。全て村内の学校。学校は厳しくなく、行かれる時に行けば良かった。国語、数学、物理自然を学んだ。学校へは一九六一年まで通い、その後はずっと農業。第五生産隊に所属。第五隊の隊長はWH。貧農。経験もあり良い隊長だった。隊長の仕事は作物の選定や分配など。

- ・当時、学生への供給は一カ月あたり一人につき食糧三三斤。
- ・一九六二年に結婚。妻はD村第生産八隊のG姓の人。現在六八歳。
- ・子どもは息子三人娘四人。彼らは皆初級中学卒で大学に行ったものはいない。孫は大学に行ったものいる。
- ・エゴは党員ではなく、隊長など役職に着いたことはない。

農業集団化時期

- ・土地改革後、土地は互助組で耕作した。互助組は家が近い人と組織する。その際、親戚かどうかは関係ない。
 - ・エゴは学生だったため初級合作社には参加しなかった。人民公社になってから参加した。
 - ・現在家全体（含息子）で土地は三三ム一。家族は一七人。トウモロコシを植える。
 - ・一九六一年に自分が労働に参加しても家の生活は良くなかった。改革開放によって生活はやっと良くなった。それは統購統銷制度が無くなったため。
 - ・三年の困難時期、脚に浮腫ができた。死んだのは老人が多く、若者はあまりいなかった。当時学生には一人につき三三斤の食糧が供給された。
 - ・当時、作物泥棒が横行した。「泥棒しなければ生活できない」という言葉が流行った。
 - ・農業集団化時期、幹部が食糧を多く取っていた。
 - ・土地の生産量は改革開放前にはあまり変わらなかった。当時はリン肥料を使っていた。
 - ・当時、疎植がされ、二尺につきトウモロコシ一本のペースで植えていた。現在株と株の間は八〇九寸である。
- 当時、自留置はあったが、一人当たり一〇二分しかなく少なかった。家族が少ない家では一ムもなかった。

現在

・現在の収入は基本的に農業によるもの。土地は三三ムーあり、家族は一七人いるので各人一・八八ムー。羊の飼育などもする。

・今までの人生で一番良い時期は今、悪かった時期は一九六〇年前後だった。

・今の幹部は良くない。これまでも自分のことは自分でしてきたので、幹部を良いと思ったことはない。人は皆幹部になると、自分のことしか考えなくなってしまう。

(五) W S Q

二〇一三年八月一九日 午前

調査者・河野正、李嘎、趙中亜

インフォーマントの年齢・干支・八六歳 辰年

(三) G Y Hより朝鮮戦争時期の逃亡兵としてW S Qの名前を聞き、尋ねる。

本人および家族について

・九歳で学校に入った。一六歳で太原にある商店で働く。ガラスや磁器を扱う商店。ここでは二年間働いた。この店は河北省の人が開いており、太原の知り合いの紹介で行った。当時は学徒であったため賃金は安かった。六月から働き始め、年末に五元もらったのみ。

- ・その後、靴屋でも二年働いた。
- ・エゴは三人兄弟の長男。弟は二人とも村にいる。土地改革の時、兄弟三人と母親の四人家族。土地は当時一五・八ムーあったが、土地改革では一人平均四ムーが村の標準とされたため中農になった。当時、家畜や大車は所有していなかった。当時はとうもろこし、コーリヤン、粟などを作っていた。
- ・若い頃、上の弟は太原、下の弟は県城に行っていた。彼らが出ていってから農業集団化までの間、エゴが彼らの土地も耕した。彼らの家族は村にいたが、下の弟の家族は後になって県城へ行った。当時の生活は苦しかったが食べる分には足りていた。

軍歴について

- ・二〇歳の時、太原で徴発され、閻錫山の軍隊に常備軍として参加。砲兵。第一九軍に所属。参加後一年で共産党が来た。共産党と戦って捕虜となり、共産党の軍隊に参加をした。P 県解放の頃、病気になったので村に帰ってきた。共産党の軍にいた期間は短かった。
- ・抗米援朝の際、兵士になったが太原から逃げてきた。兵士になった理由は「三抽一、五抽二」で、兄弟の中で年齢がちょうど良かったため。以前の参軍経験の有無は関係ない。
- ・逃げてきたことについて、村の幹部も村人も何も言わなかった。処分もなかった。

農業集団化時期

- ・一九五六年に合作社に入社。当時村には和平・勝利・紅旗の三つの合作社があつたが、紅旗社に入社。これら

は高級合作社時期に一つの社になった。一九五六年から一九六〇年まで隊長を務めた。初めは全部で二〇隊あり、そのうち第八隊の隊長を務めた。高級社化後に全一〇隊となり、第五隊の隊長となった。一〇隊あった頃は一隊二〇〇人くらい。

・隊長は表向きには選挙で選ばれるが、実際には上からの任命で選ばれた。選ばれるのは能力があるから。隊長になるのは中農が多かった。これは貧農より家庭の状況が良く、話がうまく、また能力もあつたため。地主や富農の隊長はいなかつた。これは彼らの能力が高くなかつたためであり、また彼らは隊長にはなることはできなかつたためでもある。

・一九五六年になると初級社には入らなければ「ならなかつた」。

・初級社に入っても生活に変化はなかつた。生産隊は住んでいる家の遠近によつて分けた。

・互助組には参加しなかつた。当時は参加する人は多くなく、特に会を開いて互助組の宣伝がされることもなかつた。互助組には労働したがらないような人が参加をした。

・初級社が組織される時期になると、互助組の頃とは異なり入社を促す宣伝があつた。

・一九六〇年代には民兵の副営長にもなつた。話が上手く、上級との関係も良かったため。軍歴とは関係ない。

民兵の仕事

・民兵は当時村に一〇〇人ほどいた。生産大隊一つが民兵営一つに相当。民兵の主な仕事は会議など。銃の管理は副営長であるエゴがやつた。他の民兵で軍歴がある人は少ない。高級社になつてから民兵営ができた。

・民兵の仕事と看青（作物の見張り）とは関係はない。看青は保衛の仕事。

- ・民兵と保衛の違いについて。民兵は統一して訓練を行うが、保衛はそれぞれの土地で訓練を行う。保衛は武器を持たない。民兵は、労働せずに会議などに出席するだけで労働点数がもらえる。一回の会議で一日分の労働になる計算。保衛の労働点数は年間で計算する。
- ・当時保衛は農作業をせず、専門的に保衛を行った。

三年の困難時期⁽⁵⁾

- ・一九五八年は豊作だった。しかし一九五九年になってダメになった。天候が悪く、雨が少なかったため収穫が減った。また一九五九年には生活が管理されるようになった。
- ・一九五八年は豊作だったため政府は農民が余糧を家に保管することを心配し、各家を検査した。これは、家が鼠に食われていないかを検査するという名目で行われた。結果、余糧は政府に持っていかれてしまった。
- ・一九五八年、公共食堂の浪費が多かった。一九五九年は凶作で、余糧も家にはなかった。
- ・一九六〇年には二〇〇人近くが死んだ。一九五九年には死者はおらず、一九六一年には少なくなった。
- ・一九六二年以降は状況が良くなった。死んだ者は老人が多かったが、若者には浮腫が多かった。浮腫病人専用の食堂が作られ、ここでは豆子麵を食べた。
- ・一九五九年には政府から救済糧が出された。隊長は食堂で多めに物を食べていた。

(六) W Z X

二〇一三年八月一九日 午後

調査者・河野正、李嘸、趙中亜

インフォーマントの年齢・干支・八二歳 申年

家庭の状況

・土地改革の時、家族は五人家族。母親、エゴ、そして三人の妹。当時、土地は一五ムーあり、下中農とされた。これらの土地はエゴ一人で耕していた。大車も家畜もなかった。

農業集団化時期

- ・一九五二年に互助組へ参加。この互助組は村で最初の組で、エゴの名前を取りW Z X互助組という名前。
- ・互助組に入った理由は中共が入組の宣伝をしていたから。互助組へは主に労働力のない、貧下中農が入った。
- ・三〇人余りが互助組に参加をした。内容は「変工（労働力の相互融通のこと。旧来の互助慣行もこのように呼ばれる）」。
- ・互助組は変工と同じものである。互助組前の変工と互助組は基本的には同じもの。
- ・互助組に入ったことで生活は良くなった。労働力が少なく、入社前には土地の耕作も満足にできなかったため。
- ・一九五三年にはこの互助組は初級合作社に組織された。これも村で最初の農業生産合作社であり、名前はD E F農業生産合作社。退役軍人であるD E Fによって組織されたため。一二戸が参加した。
- ・初級社も、貧下中農が主に参加をした。それより上の人々はあまり入らなかったが、これは入社を反対した訳ではなく、彼らが入ろうとしなかったため。

- ・互助組と合作社の違いの一つは分配にある。合作社では「四六分」と呼ばれる方法を採用、それは作物の六割は社、四割は自分たちに分配されるという方法であった。
- ・初級社では化学肥料を使った。また県政府が社に対して大車一台、馬二頭を寄贈した。
- ・当時P県全体で合作社は二つのみ。初級社が組織されて食糧はそれまでより増産された。
- ・一九五四年になって他の合作社も組織された。エゴは勝利社に参加。勝利社の社長になった。これは大衆によって選ばれたため。社には社長、書記、隊長、保管、会計などの役職があった。これら幹部は毎年のように変わった。
- ・勝利社は一二〇戸ほどの規模。他の社は七〇〜八〇戸で、勝利社は一番大きな規模。
- ・一九五四年時点ではまだ合作社に参加していない家もたくさんいた。
- ・一九五六年、合作社は合併して高級社になった。名前は紅旗社。
- ・最後まで合作社に入らなかったMSR、一九五八年にトラクターが来たのを見て考えを改め入社。これで村内の全員が入社したことになる。一九五八年には人民公社が成立しており、MSRが入ったのは人民公社になったから。MSRは頑固だったために社になかなか入らなかった。彼は頑固だったが、他の人との関係は悪くなかった。
- ・トラクターが社に来た際、運転の講習があった。このトラクターは村の所有ではなく、県の農業機械ステーションから貸し出されたもの。必要な時に借りてくる。機種は東方紅。一九六〇年代になると村でトラクターを買った。
- ・一九五四年より前の合作社（二社しかない段階）では社に地主・富農はいなかったが、一九五四年以降の社は地主・富農も入社した。入社を禁止するような規定はなかった。

三、解説及び考察

(一) 徴兵について

今回の聞き取りでは(一) T Y C、(五) W S Qに従軍歴があり、また(三) G Y Hの兄G Y Cにも従軍歴があった。特にW S QとG Y Cは逃亡兵であり、その後の生活が如何なるものであつたかは興味深い問題である。

まず徴兵の経緯について考えたい。中共の徴兵に関するこれまでの研究は、多くが内戦期を対象としたものであるが、従来は土地改革で農民が土地や財産を得たことで、自らの財産を守るために中共の勝利のために戦う選択をした、という説明がされ、中共の軍事動員の成功の背景として土地改革が強調されてきた。⁶⁾他方、土地を得たことで農民が村に残って土地を守りたいと考え、逆に徴兵が困難になったことを指摘するスザンヌ・ペツパーや、土地改革と徴兵との関連は薄いと指摘する阿南友亮などによつて、そのような視点は見直されつつある。⁷⁾そこで、中共による新国家が成立し全国規模で土地改革が完了した後、一九五〇年代の徴兵が如何なるものであつたのかを考察する意義はあるだろう。

T Y Cは経済的理由により自ら志願して兵士となったが、W S Q及びG Y Cは志願兵ではない。どちらも「三抽一、五抽二」という制度に基づき、兄弟の人数と年齢によつて半ば機械的に徴兵されている。また彼らはどちらも階級が上中農、中農と比較的良くない階級であり、それが徴兵の要因となった可能性も考えられたが、インタビューではそのような旨は明言されなかった。またW S Qは内戦期に閩錫山の軍に参加し、その後中共の兵士になったが、一九五〇年代に徴兵された際、軍歴の有無は関係なかったと説明している。果たして本当にこのように機械的に徴兵が行われたのか、それとも各人の経歴や階級などが考慮の対象となつていたのかは、文書史料

などを通じて更なる考察を行う必要がある。

加えて、彼らの逃亡後の生活についても考えてみたい。GYCは軍から逃亡し、兄を頼って天津まで行き、その後現在まで天津で生活しているが、その際逃亡兵という過去は問題とならず、また村内でも彼の逃亡は問題になっていないと回答されている。WSQも逃亡について、村の幹部や村人から咎められはしなかったと答えている。これは問題となった過去を隠している可能性もあるが、WSQのその後の経歴からも、逃亡兵としての過去の影響はあまり見られない。例えば彼は一九五〇年代後半には生産隊長を務め、一九六〇年代には民兵の副営長となっている。また上級の幹部との関係も良かったと答えており、ここからも逃亡が問題となった様子はいかがうことができない。

この理由は現時点では明確にすることは難しいが、農民が中共や上級政府と価値観を共有していなかったことが一つの背景としてあることは予想される。例えば筆者のこれまで明らかにしたところでは、同時期には中共の階級政策も農民に十分理解されず、中共が外からもたらした階級よりも旧来の人間関係の方が依然として影響力を維持していた。D村でも、上中農など悪い階級であった人がその後の冷遇などは顕著ではない。そのため階級政策と同じく、「逃亡者＝悪いもの」という上級の価値観は、村内の人間関係の下では十分な影響力持たなかった可能性がある。この点も文書史料などから考察が必要だろう。

(二) 農業集団化について

土地改革の後、中共は互助組や農業生産合作社などの農業集団化政策を進める。多くのところでは一九五一年より正式に初級農業生産合作社の組織化を始め、一九五五年前後には高級農業生産合作社が組織され、一九五八

年には人民公社が組織される。高級社時期には基本的にはほぼ全農民が合作社や公社に組織されるようになるが、D村では一人だけ、人民公社が成立するまで集団化に参加しなかった人物がいた。MSRである。彼は(二)JSLと(一六)WZXの聞き取りで名前が登場する。それによるとMSRは性格が頑固であり、また「他人のものを欲しくない」という考えのために、貧農であったのに土地改革では土地や家屋を受け取ろうとしなかった。そのため生活は貧しかったが、互助組や合作社には参加をせず、人民公社成立後まで個人経営で農業を続けていた。

それではMSRはどのような人間であり、村内では如何なる立場にあったのだろうか。JSLの聞き取りでは、MSRは他人と交流が少なく、威光や人望がなかった人であったと説明される。だとすると彼は社会から乖離した存在であったのかもしれない。しかしWZXの聞き取りからは異なる像が見える。それによるとMSRは性格が頑固であったが、他の人との関係は悪くなかった。またMSRは人民公社に入社後、生産隊の副隊長になっており、そこから、他の人間との関係が必ずしも悪くなかったことが想像される。

今回の調査の中で、MSRの息子たちがD村で現在も生活していることが分かった。そこで彼らにインタビューをできるように案内人MWBに頼んだのだが、様々な理由を言って、インタビューをさせてくれなかった。推測の域を出ないが、MWBとMSR家族との関係が良くない可能性もあり、MSRとMWBとの関係がその一因となっている可能性も想像できる。当然、そのことがMSRが社会から乖離した存在だったということに直結する訳ではないが、少なくとも一部の人間との関係は良くなかった可能性はある。

どちらにしても、長期にわたり合作社に参加をしなかった村で唯一の人間が、村の中で如何なる立場に置かれていたのかという問題は、農民たちが集団化に参加しない人間のことを如何に捉えていたのかという問題のみな

らず、農民たちが集団化や中共の政策を如何に捉えていたのか、そして農民にとつて農業集団化とは何であったのか、という大きな問題につながるものである。以後の課題として、前節で挙げた疑問点と共に、文書史料などを利用して解決を図りたい。

註

- (1) 階級政策については拙稿「華北農村における階級政策と村落社会」一九五〇～一九六〇年代河北省を中心に『現代中国』第八七号、二〇一三年九月 八五—九六頁参照。戦時動員については拙報告「朝鮮戦争時期、中国農村における戦時動員と軍隊生活」(第一一〇回史学会大会、二〇一二年十一月、於東京大学)を行い、現在投稿準備中である。なおこれらは河北省を主要な対象とする研究である。
- (2) 調査村落の概況は二〇一二年度、村のLRX書記からのインタビュー(未整理)による。
- (3) 山西商人とは主に清代の交易で活躍した山西省出身の商人を指す。清代の山西省は交通の要衝であり、山西商人は中国内地・蒙古・新疆など広くに及んだ。中国内地の塩や茶の他、蒙古の毛皮などを交易した。山西商人に関する概説的な説明としては佐伯富「清朝の興起と山西商人」『中国史研究』第二、東洋史研究会、一九七一年 二六三—二七二頁参照。
- (4) 同史料については行竜・馬維強「山西大学中国社史研究中心『集体化時代農村基層檔案』述略」『中国農村研究』第五集、福建教育出版社、二〇〇七年 二七三頁—二八九頁参照。
- (5) 三年の困難時期とは一九五八年から始まる大躍進運動の失敗に伴う飢饉・混乱を指す。
- (6) 例えば陳永發「内戦、毛沢東和土地改革—錯誤判断還是政治謀略(下)」『大陸雜誌』第九二卷三期、一九九六年三月 一一—一九頁など。
- (7) Pepper, Suzanne, *Civil War in China: The Political Struggle, 1945-1949*, 2nd Edition, Rowman & Littlefield Publishers, 1999, Lanham. 阿南友亮「軍隊建設に見る秩序再編と動員の関係」高橋伸夫編『救国、動員、秩序—変革期中国の政治と社会』慶應義塾大学出版会、二〇一〇年、七五—一〇四頁。
- (8) 前掲拙稿二〇一三。